

「日本人教師との一対一の会話練習活動」と学習者による評価

関 裕子 松原 潤

(原稿受理日 2004年4月2日)

はじめに

会話の授業を担当している教師の中には、どうしたら学習者の会話力を向上させることができるか、という悩みを抱えている人も少なくないだろう。

筆者は日々の教授活動を通して、また、学習者と接する中で、基本的な会話のやりとりや自分の伝えたいことを日本語で表現することが困難な学習者が多いのではないかと感じていた。

そこで、筆者は学習者の会話力の向上を目指し、新たな試みとして、「日本人教師との一対一の会話練習活動」を行った。

本稿はナレースワン大学日本語科（以下、「本科」とする）で2003年度後期に行った活動と、それに対する学習者の評価についてまとめたものである。

1. 本科におけるこれまでの会話の授業の概要

本科のカリキュラムにおいて、会話の授業が独立して行われるのは2年次の前期からである。本科に在籍する学習者は、2年次前期に「日本語会話Ⅰ」、後期に「日本語会話Ⅱ」、3年次前期に「日本語会話Ⅲ」、そして、後期に「Communicative Japanese」という科目名の会話の授業を履修することになっている。尚、他の日本語関連科目との履修関係については、小西（2003）の22～24頁を参照されたい。

本科では、これまで大学開発教材『ナレースワン大学日本語会話』を使用して、「日本語会話Ⅰ」「日本語会話Ⅱ」「日本語会話Ⅲ」の授業を行ってきた。このテキストは、主に機能シラバスによって構成されている。実際の授業では、ある機能を取り上げ、その機能を持つ文型や表現のバリエーションを導入し、そして、その機能がよく用いられる場面を取り上げたり、会話の流れをフローチャートで提示したりして、ロールプレイやタスク練習を行った。

「日本語会話Ⅲ」に続く「Communicative Japanese」は、会話の授業の総まとめと捉え、既習の学習項目を実際に運用することを目的としている。前年度は、ビデオ教材『ヤンさんと日本の人々』『続ヤンさんと日本の人々』（国際交流基金日本語国際センター）を使い、学習者主体の活動を行った。具体的には、学習者がビデオの中で興味を持ったことから、各自発表のテーマを決め、それについて本やインターネットで調べたり、日本人に日本語でインタビューしたりしてまとめ、それを授業中に発表し、発表後学習者同士が質疑応答する形で進められた。

2. 「日本人教師との一対一の会話練習活動」を導入するに至るまでの経緯

筆者は本科の学習者と接する中で、会話テストや教室での活動ではタスクを達成することができるものの、基本的な会話のやりとりや自分の伝えたいことを日本語で表現することが困難な学習者が多いのではないかと感じていた。

筆者はその原因を特定することができなかったが、学習者の発話の機会が不十分であったことが原因の一つではないかと考えた。

そこで、学習者の発話の機会を増やすために、新しい試みとして教師と学習者が一対一でまとまった時間会話をする練習を導入することにした。

3. 「日本人教師との一対一の会話練習活動」の実践

3.1 今回の「Communicative Japanese」の授業について

この活動について述べる前に、今回行った「Communicative Japanese」の授業全体について簡単に述べる。

3.1.1 学習者

学習者は本科の3年生35名と4年生1名の計36名である。関が17名を、松原が19名を担当した(以下、関が担当したグループを「関クラス」、松原が担当したグループを「松原クラス」とする)。

3.1.2 学習時間

この科目は、週2回、1回2コマ(1コマ50分)で、16週にわたって行われる。

3.1.3 授業内容

主な授業内容は、「リスニング練習」「映画・テレビドラマを使った教室活動」「日本人教師との一対一の会話練習活動」の3つである。

「リスニング練習」は、学習者のリスニングの力を伸ばすことと、中級レベルの語彙を増やすことを目的としている。実際には、河原崎幹夫監修『中級日本語聴解練習 毎日の聞きとり50日』(凡人社)の上巻と下巻から19課分取り上げ、教室一斉授業の際に、毎回、授業の前半約30分で行った。

「映画・テレビドラマを使った教室活動」は、学習者が自然な日本語を聞いて理解できたという達成感を得ることと、ストーリーの流れを説明したり、自分の意見を述べたりすることを主な目的としている。実際には、宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』とフジテレビ放映ドラマ『世にも奇妙な物語』から5つの話を取り上げた。週2回の授業のうちの1回をこの活動に充てた。

「日本人教師との一対一の会話練習活動」については、次節で詳しく述べる。

これらの他に、自主学習として250字前後の文章を音読する練習をさせた。これは日本語の音とアクセントを正しく発音することを目的としている。学習者には練習の際、モデルテープを聞いてできるだけ同じように音読するように指示した。そして、カセットテープに自分の音読を録音し、教師に提出させた。これを学期中に4回課した。

3.2 「日本人教師との一対一の会話練習活動」について

この活動は主に、日本人教師と一対一で行う会話練習と、その練習のフィードバックからなっている。尚、この活動の手順に関して、萩原・榎原(2003)を参考にした。

3.2.1 活動の目的

この活動は学習者に発話の機会を多く与え、学習者一人一人が抱える学習上の問題に対応することによって、基本的な会話のやりとりや自分の伝えたいことを日本語で表現することができるようになることを目的としている。

3.2.2 活動の「Communicative Japanese」における時間的な位置付け

3.1.3で述べたように、「Communicative Japanese」の主な授業内容は、「リスニング練習」「映画・テレビドラマを使った教室活動」「日本人教師との一対一の会話練習活動」の3つである。週2回の授業のうち1回を「リスニング練習」と「映画・テレビドラマを使った教室活動」に、もう1回を「日本人教師との一対一の会話練習活動」に充てることにした。

尚、会話練習の部分は、正規の授業時間外に個別で行い、フィードバックの部分は正規の授業時間に教室一斉授業の形態で行うことにした。そして、フィードバックを行わない週は休講とした。

3.2.3 活動の実施概要とその流れ

今回、学習者一人あたりの会話練習の回数を6回、1回の練習時間は20分から30分とした。

会話の相手は、関クラスの学習者の場合、まず、授業担当者である関と2回、その後2回は松原、そして、残りの2回は関とした。松原クラスの学習者はこの逆である。尚、この活動時に限って、松原クラスの学習者の内1名を関クラスに移動させ、受け持ち学習者数を同じにした。そして、筆者はそれぞれ、1日1～2人、2週間で18人の学習者と会話することとし、会話をする曜日・時間（平日の主に午後5時以降）と学習者を固定した。そして、この2週間を1サイクルとし、学期中にこのサイクルを6回行った。

以下、活動の流れの概要を述べる。

(1) 練習の前

学習者は話題を自分で考えて⁽¹⁾、関連語彙を調べておかなければならない。また、その日の会話の目標を設定し、授業初日に予め配布した会話の「自己評価シート」(資料1)⁽²⁾に書き込んでおく。

(2) 練習の時

会話練習の際、会話をすべてカセットテープに録音する。

(3) 練習の後

学習者は会話を録音したカセットテープを持ち帰って、その日のうちに聞いて自分の会話を振り返り、「自己評価シート」を完成させる。翌日この「自己評価シート」とこのカセットテープを授業担当の教師に提出する。

教師はそのカセットテープを聞いて、「自己評価シート」にコメントを書き、返却する。

その後、学習者に共通して見られる問題を学習項目として取り上げ、学習者にフィードバックする。このフィードバックは、教室一斉授業の形態で行う。

3.2.4 会話練習の際に留意したこと

筆者は会話の最中、必要以上に語彙や文型をコントロールしたりしないで、できるだけ自然な日本語で話すように心がけた。

3.2.5 会話練習のフィードバック

この活動の開始前に、筆者は活動において取り扱うべき学習項目を設定できなかった。その理由は、なぜ学習者が基本的な会話のやりとりや自分の伝えたいことを日本語で表現することが困難であるのか、その原因を特定できなかったからである。

そこで、実際に学習者と会話をすることで、学習者に共通して見られる問題を見つけ、それを学習項目として取り上げて学習者にフィードバックした。このフィードバックは、教室一斉授業の形態で学期中に4回行った。

具体的には、「あいづちの使用」「会話の流れに気をつける」「相手の発言に対してコメントをする」「聞き手の反応に注意する」「例を挙げて説明する」「フィラーの使用」「一つの話題でできるだけ多く話す」といった学習項目を取り上げた。また、「どうしたら会話が上手になると思うか」「会話が上手な人とはどんなことができる人だと思うか」というテーマでクラス全体で話し合った回もあった。

以上のような教室一斉授業の形態とは別に、学習者が抱える個別の問題に対応するために、当初の予定を変更し、5回目の会話練習の時間に個別でフィードバックを行った。学習者には、このフィードバックの前に、4回目の会話を録音したカセットテープを聞いて、前半10分間の内容を文字化してくるように指示した。フィードバックはこの文字化資料とカセットテープを用いて行った。そこでは、文法や語彙の誤りを訂正したり、あいづちの有無や談話の流れについて指摘したりした。

4. 学習者による活動の評価と自己評価

4.1 調査の目的

授業終了後に学習者全員を対象に質問紙を用いて調査を行った。調査の目的は以下の通りである。

- (1)「学習者が今回の『Communicative Japanese』の授業をどう評価しているか」を知る。
- (2)「学習者が今回の『Communicative Japanese』の授業を通して自己の日本語能力に変化があったと認識しているか」を知る。また、「もし変化があれば、それはどのようなものであるか」を知る。
- (3)「学習者が今回の『Communicative Japanese』の授業を通して日本語学習に対する意識に変化があったと認識しているか」を知る。また、「もし変化があれば、それはどのようなものであるか」を知る。

4.2 質問紙

質問紙(資料2)は筆者が独自に作成し、それをタイ語に訳した⁽³⁾。質問紙はAとBからなり、質問紙Aは授業内容についての質問で、授業で行った内容および定期試験の7つのカテゴリーに対して、それぞれ質問項目が5から6ある。質問項目は5段階(5:とてもそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:そう思わない、1:全くそう思わない)で回答する形になっている。

質問紙Bは、(1)4技能(「聞く」「話す」「読む」「書く」)に対する学習者の自己評価、(2)日本語学習に対する意識的な変化、(3)授業全体の感想など(質問紙では「その他」とした)について、それぞれ自由記述で答えるもので、タイ語で記述してもよいと調査実施時に口頭で指示した。質問紙は全て無記名とした。

集計の際、質問紙Aは回答に不備のあった2名を除く34名を有効回答として扱った。質問紙Bについては、学習者36名全員の回答を有効回答とした。

集計・分析には、統計ソフト「SPSS ver.11.5 for Windows」を使用した。

4.3 「日本人教師との一対一の会話練習活動」に対する評価

4.3.1 会話練習に対する評価

この練習に関する質問項目(質問紙A-3)は6項目で、表1は各項目の評価結果の度数分布と回答の平均値と標準偏差を示したものである。

この表から、「教師と会話練習をする活動は役に立ったか」に対する評価の平均値が最も高く、度数分布を見ると、5と評価している学習者が17名と全体の50%を占めており、さらに4(12名、35.3%)と合わせると8割以上を占めていることがわかる。

また「会話の後、教師は適切なアドバイスをしたか」に対しても、4.29と評価が高く、5と4を合わせた回答が約9割を占めている。

さらに「教師と会話をするという方法は好きか」「自己評価シートは役に立ったか」も共に3.71と比較的高い評価がされている。

一方で「1回の会話の時間は長かったか」「学期中の会話の回数は多かったか」はそれぞれ3.29、3.03と中間的な評価がなされているが、度数分布を見ると、「時間が長い」「回数が多い」という評価の割合が高いことがわかる。

表1 会話練習に対する学習者の評価の結果

質問項目	度数分布					平均値	標準偏差
	5 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)		
教師と会話をするという方法は好きか。	7(20.6)	13(38.2)	12(35.3)	1(2.9)	1(2.9)	3.71	0.94
自己評価シートは役に立ったか。	6(17.6)	16(47.1)	9(26.5)	2(5.9)	1(2.9)	3.71	0.94
1回の会話の時間は長かったか。	0(0)	12(35.3)	21(61.8)	0(0)	1(2.9)	3.29	0.63
学期中の会話練習の回数は多かったか。	1(2.9)	8(23.5)	19(55.9)	3(8.8)	3(8.8)	3.03	0.90
教師と会話練習をする活動は役に立ったか。	17(50.0)	12(35.3)	4(11.8)	1(2.9)	0(0)	4.32	0.81
会話の後、教師は適切なアドバイスをしたか。	14(41.2)	16(47.1)	4(11.8)	0(0)	0(0)	4.29	0.68

4.3.2 フィードバックに対する評価

会話練習のフィードバックに対する質問項目（質問紙 A-4）は 5 項目で、表 2 は各項目の評価結果の度数分布と回答の平均値と標準偏差を示したものである。この 2 つの表から「教師の準備は十分だったか」に対する評価の平均値が 4.38 で最も高く、次いで、「フィードバックの授業は役に立ったか」が 4.12、「フィードバックの授業内容は適切だったか」が 4.03 と評価が高いことがわかる。さらに、「教室でフィードバックをするという方法は適切だったか」が 3.82、「教師の説明はわかりやすかったか」が 3.71 と比較的高い評価がされている。

全体を見ると、否定的な評価をしている学習者が少なく、肯定的な評価である 5 と 4 の割合が高い。

表 2 フィードバックに対する学習者の評価の結果

質問項目	度数分布					平均値	標準偏差
	5 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)		
フィードバックの授業内容は適切だったか。	6(17.6)	23(67.6)	5(14.7)	0(0)	0(0)	4.03	0.58
フィードバックの授業は役に立ったか。	9(26.5)	20(58.8)	5(14.7)	0(0)	0(0)	4.12	0.64
教室でフィードバックをするという方法は適切だったか。	6(17.6)	16(47.1)	12(35.3)	0(0)	0(0)	3.82	0.72
教師の説明はわかりやすかったか。	3(8.8)	20(58.8)	9(26.5)	2(5.9)	0(0)	3.71	0.72
教師の準備は十分だったか。	14(41.2)	19(55.9)	1(2.9)	0(0)	0(0)	4.38	0.55

4.4 学習者の 4 技能に対する自己評価の結果

学習者は「Communicative Japanese」を受講する前と受講した後の自己の日本語能力の変化についてどのように認識しているだろうか。質問紙 B-1 では「この科目を受講する前と比べて（あなたの日本語の 4 技能に）何か変化がありましたか。具体的に詳しく説明してください」と指示した。

以下、4 技能の中で、今回の会話練習と関係が深いと思われる「聞く」能力と「話す」能力についての回答の結果をまとめる。

4.4.1 「聞く」能力に対する評価

「聞く」能力に対して、「よくなった」「少し上達した」など、＜よい変化があった＞と解釈できるものが 36 名中 28 名で、全体の約 78% を占めている。この中には＜よい変化があった＞としながらも、「時々、聞いてわからない」「まだあまりよくない。もし速く話したら聞き取れない」「意外とそれほど変わらない」というものも含まれている（28 名中 6 名）。一方、「あまり変化していない」「わかることもあるし、わからないこともある」など、この授業を通して特に変化がなかったとしているものが 6 名、「まだ問題がたくさんある。話すスピードが速すぎたら、内容を把握することができない」といった自己の問題点のみを述べているものが 1 名、無回答が 1 名だった。

尚、今回行った「教師との一対一の会話練習活動」に関して言及している回答はなかった。

4.4.2 「話す」能力に対する評価

「話す」能力に対して、＜よい変化があった＞と解釈できる回答が36名中32名で、大半を占めていた。尚、この中には＜よい変化があった＞としつつも、「文法も間違える」「間違うのが怖くて難しい文法を使おうとしない」「もう一度文法を復習しなければならない」といった自己の問題点を認識し、目標などを新たに設定していると思われるものも含まれる(8名)。その他は、「あまり変化していないと思う」が1名、自己の問題点のみに触れているものが2名、無回答が1名だった。

＜よい変化があった＞という回答(32名)を見ていくと、「正しい文法を使えるようになった」「あらかじめタイ語で考えないで、すぐに簡単な文を話せるようになった」「流暢に話せるようになった」「長くて複雑な文を話せるようになった」といった自己のスキル面の変化を具体的に述べているもの(17名、延べ人数)、「先生と会話する機会を得ることによって、話す度胸がついた」「恥ずかしがらずに話せるようになり、いい会話の練習になった」といった日本語を話す際の不安の軽減について述べているもの(12名、延べ人数)が多かった。

また、「先生と会話したから、少しよくなった」「先生と会話をする機会を得ることで、日本語を使う度胸がついた」「先生と話す時、言葉の使い方に気をつけるようになった」など、36名中7名がこの活動が学習者にプラスの変化をもたらしたと解釈できる回答をしていた。

4.5 日本語学習に対する意識の変化

「Communicative Japanese」を受講したことによって、学習者の日本語学習に対する意識に変化があっただろうか。質問紙B-2では「日本語学習に対して何か意識の変化がありましたか。具体的に詳しく説明してください」と指示した。

その結果、36名中13名の学習者が日本語学習に対する意識に変化があったと解釈できる回答をしている。それ以外は、意識の変化について言及していないものと、意識に変化があったと解釈できないものが22名、無回答が1名である。

意識に変化があったと解釈できる回答は、主に、「自分の意見をもっと表現したい」「新しい語彙をもっと知りたいと思った」「上手になるために先生や友達と積極的に日本語の練習をするようになった」といった学習意欲の向上について述べているもの、「この授業によって3年日本語を勉強してきて、あまり上達していないことがわかった」「話す練習をして、自分の日本語が上手になったと思うし、どこが欠点かわかった」「まだ、直さなければならない文法の誤りがある」といった自己の問題点の気づきについて述べているもの、「以前は恥ずかしがり屋で先生とうまく話せなかったが、日本人と日本語で話す際、積極的になった」といった日本語を話す際に抱く不安の軽減について述べているものである。

また、2名の学習者が「先生と話したことで話す度胸がとてついた」「先生と話すことで、何かしらたくさん得るところがあった」と、この活動が日本語学習に対する意識にプラスの変化をもたらしたと解釈できる回答をしている。

5. 調査結果の考察

5.1 「日本人教師との一対一の会話練習活動」に対する評価についての考察

5.1.1 会話練習に対する評価についての考察

質問紙A-3の「教師と会話をするという方法は好きか」と「自己評価シートは役に立ったか」という質問項目では、半数以上の学習者が「好き」「役に立った」と回答している。また、「教師との会話練習活動は役に立ったか」と「会話の後、教師は適切なアドバイスをしたか」では8割以上の学習者が肯定的な評価をしている。このようにこの練習が高い評価を得た理由として、これまでの教室一斉授業に比べて、学習者一人一人の発話の機会が確保されたことや、教師が学習者一人一人の能力に合わせて対応できたことが挙げられる。また、4.4.1と4.4.2で述べたように、多くの学習者が自己の「聞く」能力と「話す」能力に＜よい変化があった＞と評価していることも理由の一つであろう。

一方、学習者の「1回の会話の時間は長かったか」「学期中の会話の回数は多かったか」では、共に「3：どちらとも言えない」という中間的な評価の割合が最も高く、次いで「時間が長い」「回数が多い」という評価の割合が高かった。このような結果になった原因には、以下のような3つの要因が関係していると考えられる。

- (1) 一つの話題で20分から30分間会話を維持することが学習者にとって困難であったこと。
- (2) 大学のカリキュラム上、3年次後期の履修科目が4年間を通して最も多く（7科目21単位）、学習者は時間的に余裕がなかったこと。
- (3) この練習が主に正規の授業終了後の夕方5時以降に行なわれたことが、学習者にとって負担になっていたこと。

特に、(3)に関しては、筆者自身も、通常勤務時間外にこの練習のために毎日約1時間割いたことに負担を感じるときもあった。本科では今後、入学定員数の増加が見込まれている。今後、同様の練習を行なう場合、今回以上に時間的な問題の解決が課題となるだろう。

5.1.2 フィードバックに対する評価についての考察

4.3.2で述べたように、教室一斉活動で行ったフィードバックに対しては、全体的に評価が高かった。しかし、質問紙A-4の「教室でフィードバックをするという方法は適切だったか」「教師の説明はわかりやすかったか」の評価は、他の質問項目の評価に比べやや低い。

このような評価を得たのは、授業で取り上げた学習項目は学習者に受け入れられたが、教室一斉授業でフィードバックを行うという方法よりも、学習者が会話練習と同様の個別で行う方法を望んでいるからなのではないかと考える。

5.2 学習者の自己評価の結果についての考察

質問紙B-1における「聞く」能力と「話す」能力の変化に対する自己評価では、大半の学習者が受講前よりも＜よい変化があった＞と解釈できる回答をしている。この結果から、「Communicative Japanese」の授業内容が学習者の「聞く」能力と「話す」能力にプラスの変化をもたらしたのではないかと考えられる。

ここで、「日本人教師との一対一の会話練習活動」の影響について考えてみると、「話す」能力の変化に対する自己評価では7名、質問紙B-2の日本語学習に対する意識の変化についての自己評価では2名の学習者がその影響について言及している。しかし、「聞く」能力の変化に対する自己評価では、これについて言及している学習者はいなかった。以上のような結果だけでは、この活動の影響について判断することはできない。これは、質問紙Bでは「Communicative Japanese」について質問しているのであって、その授業内容の一つである「日本人教師との一対一の会話練習活動」について特定して質問していないからである。

6. まとめと今後の課題

今回のこの活動は、正規の勤務時間外に毎日約1時間行ったため、時間的な負担を感じることもあった。しかし、それ以上にこの活動がもたらしたものは大きかったと感じている。筆者にとっては、この活動が学習者一人一人と向き合うきっかけになったこと、学習者との会話を録音したカセットテープを聞くことが筆者自身が普段無意識に持っている自己の会話のスタイルを再認識するきっかけになったことである。学習者にとっては、この活動が日本語を話す際に抱く不安の軽減の一助となったことである。これはこの授業の目的とは必ずしも一致しないとはいえ、今回の活動で期せずして得られた成果であった。これに関しては、同僚の教師からも「以前より授業以外でも積極的に話しかけてくるようになった」という声が聞かれた。

筆者は今後もこのような活動を行なっていきたいと考えているが、この活動には今後検討すべきさまざまな問題が残っている。例えば、1回の練習時間の妥当性、学習項目とその効果的な指導法である。さらに、この活動が学習者のどのような側面に効果をもたらしたかを明らかにしたい。

また、今回この活動を3年次後期で行なったが、このような活動を本科の会話の授業全体のどの段階で導入するかについて、今後検討する必要がある。そのためには、本科の会話科目全体の最終到達目標の設定および各科目での到達目標の再設定が必須である。さらに、それら到達目標に対応した会話科目の学習項目の選定をしなければならない。

以上の問題点の解決を今後の課題としたい。

最後に、「基本的なやりとり」や「自然な会話」など、本稿において使用している用語の定義が不明確であることと、この活動が実際にどの程度学習者の会話能力を向上させたかという客観的なデータに欠けているため、この活動の有効性については不明であることを明記しておく。

注

⁽¹⁾ 尚、今回、4回目と6回目の会話練習の話題は、筆者が予め提示することにした。4回目の話題は「タイの学校生活について」、6回目の話題は「卒業後のこと、将来のこと」とした。

⁽²⁾ この「自己評価シート」は、萩原・榊原（2003）中の添付資料 "Self-evaluation form" を日本語に訳したものである。

⁽³⁾ 翻訳の際、日本語・日本文化研修留学生の経験を有する本科の学生の協力を得た。

参考文献

小西広明(2003)「タイの高等教育機関におけるカリキュラム ―ナレースワン大学を例として―」

『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』第6号、国際交流基金バンコック日本語センター、19-36

萩原章子、榊原芳美(2003)『日本語会話能力のための自己評価 ―学習の場と実践の場の連携をめざして―』www.earlham.edu/~japn/documents/Sakakibara_Hagiwara.pdf

自己評価シート

____月 ____日 名前_____

◎会話をする前に書いてください。

先生と会話をする前に、今日の会話の目標を設定してください。

例) 日本の流行ファッションとそれに対する考えを聞く。

◎会話をした後で書いてください。

以下の質問に対して、自分の会話を振り返って0から10で評価してください。

0: 全くそう思わない 5: どちらともいえない 10: 全くそう思う

1. 会話を楽しめましたか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

2. トピックをしばしば変えることなく、一つのトピックでたくさん話すことができましたか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

3. 先生が話したことを理解できましたか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

☆もし理解できなかったとしたら、

それはどうしてだと思いますか。書いてください。

4. 先生はあなたが話したことを全部理解できたと思いますか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

☆もし理解できなかったと思うなら、

それは何が原因だと思いますか。書いてください。

5. あなたの話す日本語は正確ですか（語彙、構造、活用、など）。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

6. 発音やイントネーションはよかったですか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

7. 最近習った語彙や文法を使いましたか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

8. 前回より上達したと思いますか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

9. 今日のあなたの日本語に満足しましたか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

10. 会話をする前に立てた目標をどの程度達成することができましたか。

0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

◎今日のあなたの会話について

1. 一番興味深い発見は何ですか。日本の文化または社会について何か新しいことを聞きましたか。

2. 他に何か気づいたこと、発見がありましたか。

3. 次回、あなたは日本語のどんな面を上達させたいですか。

—教師からのコメント—

資料 2 (カテゴリー 1、2、5～7 の質問項目は省略)

แบบประเมินผลวิชา Communicative Japanese
(ไม่มีผลต่อการประเมินผลการเรียน)

A: เกี่ยวกับเนื้อหารายวิชา

คำชี้แจง โปรดทำเครื่องหมาย ☒ ลงใน ☐ ที่ตรงกับความคิดเห็นของท่าน
(5-มากที่สุด 4-มาก 3-ปานกลาง 2-น้อย 1-น้อยที่สุด)

- 1. การฟัง
- 2. การดูวิดีโอ
- 3. การสนทนากับผู้สอนนอกเวลาเรียน

	ระดับความคิดเห็น				
	5	4	3	2	1
ท่านชอบวิธีการสนทนากับผู้สอนนอกเวลาเรียนนี้หรือไม่					
แผนการประเมินตนเองมีประโยชน์หรือไม่					
ระยะเวลาในการสนทนาแต่ละครั้งนานหรือไม่					
จำนวนครั้งในการสนทนาทั้งหมดมากหรือไม่					
กิจกรรมการสนทนากับผู้สอนเป็นประโยชน์หรือไม่					
หลังจากการสนทนากับผู้สอนให้คำปรึกษาที่เหมาะสมหรือไม่					

4. เกี่ยวกับ Feedback ของกิจกรรมการสนทนากับผู้สอน

	ระดับความคิดเห็น				
	5	4	3	2	1
เนื้อหาในชั่วโมงเรียน Feedback เหมาะสมหรือไม่					
ชั่วโมงเรียน Feedback มีประโยชน์หรือไม่					
วิธี Feedback ในชั้นเรียนเหมาะสมหรือไม่					
คำอธิบายของผู้สอนเข้าใจง่ายหรือไม่					
การเตรียมตัวของผู้สอนเพียงพอหรือไม่					

- 5. การฝึกอ่านออกเสียง (การบ้าน)
- 6. การสอบกลางภาค
- 7. การสอบปลายภาค

B: เกี่ยวกับการประเมินตนเอง (ผู้เรียน)

เมื่อเปรียบเทียบกับก่อนเรียนวิชานี้ ท่านมีความเปลี่ยนแปลงในด้านใดบ้าง โปรดอธิบายอย่างละเอียดพร้อมทั้งยกตัวอย่างด้วย (โปรดเขียนภาษาไทยด้วยลายมือที่เข้าใจง่าย)

1. ทักษะภาษาญี่ปุ่น

การฟัง

การพูด

การอ่าน

การเขียน

2. ท่านมีความรู้สึกลงและทัศนคติต่อการเรียนเปลี่ยนแปลงไปหรือไม่ อย่างไร โปรดเขียนและยกตัวอย่างมาโดยละเอียด

3. อื่นๆ